



進修同窓会 HP にアクセス



ディーゼル船「隼丸」と土浦警察署(『水郷つちうら回想』保立俊一(中31回))
 警察署前の火の見櫓は1924[大正13]年に建てられた。

土浦中学生と発動機船

1876[明治9]年にガソリンエンジン、1886[明治19]年に焼き玉エンジン、1893[明治26]年にディーゼルエンジンが発明されると、こうした内燃機関を搭載した船が、航行を始めました。

霞ヶ浦でも、明治30年代には、発動機船(内燃機関を動力とする船)が、姿を見せていました。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

発動機船「隼丸」

霞ヶ浦に発動機船が登場した正確な年月は分かりませんが、明治30年代には石油発動機船が航行していたようです。1901[明治34]年7月発行『進修第3号』には、逆浦小童(ペンネーム)が、夏休みで帰省中に、潮来の実家から佐原の叔父宅を姉とともに船で訪ねた時の雑文「佐原の一日」が掲載されています。逆浦は、乗船した船を

「……、此船は石油を燃やして発動せしむるので、僕などでも一人片側へ乗れば、船体が曲ると云ふ様な小さな船で、潮来と佐原との間を一日二回づゝ往来するのである。志かし乗客が少ないから左程窮屈ではない。……。」と記しており、彼の乗った船は、「ポンポン船」と呼ばれた、焼き玉エンジン(注1)搭載の発動機船であったようです。

「……、午后四時になつたので、汽船には間に合はないから、飛脚船で帰ることにした。此飛脚船と云ふのは、曰く潮来から佐原へ通うて、人の買物を依頼されたり、荷物を運送したりして、賃金を獲るものである、汽船とちがつて、屋根がないから、……。」と「帰途にもポンポン船を利用したようです。」

1904年以降には、内国通運の「通運丸」にも、石油発動機を搭載した船(第21・22・23・37号)が見られるようになるなど、内燃機関は普及していったようです。

1912[大正元]年には、土浦警察署が、発動機船「隼丸」で、違法操業を取り締まるための霞ヶ浦水上警備を開始しています。この警備船は、ディーゼルエンジン搭載の新鋭船に後置き換えられますが、中31回保立俊一は、『水郷つちうら回想』「霞ヶ浦の漁業と隼丸(取締船)」の中で、「隼丸」については、次のように述べています。

「……、【川口川沿いにあった】警察署の密漁取締船が隼丸である。隼丸の一号船

は焼き玉エンジンのポンポン船であった。密漁の取締りは夜間が多かつたが、ポンポンとエンジンの音をひびかせて行くと、密漁船は網をほうり出していち早く逃走してしまい、あとには漁具や網だけが残されているだけであつた。網を引き上げて警察署前のダシ【船着き場】に帰つた。……、後に第二隼丸が出来た。ディーゼルエンジンを積んだ当時の新鋭船であり、速度も一五ノット【1ノットは1時間に1海里(1852m)を進む速さ】ぐらゐ出る船であつたので、密漁でつかまる者が多くなつた。没収された網は警察署の裏の武道場わきの小屋に山積みになつていた。……、小学生の頃隼丸に乗せてもらったことがある。船の前方の操舵室の屋根に大きなサーチライトがあつてあり、船の半分は機関室であつた。……。」

1927[昭和2]年1月発行『進修第25号』には、ディーゼルエンジン搭載の、この「隼丸」に便乗させてもらった5年生石島可也(中26回)の「隼丸に便乗して」が、載っています。

石島は、1926[大正15]年7月19日、試験休みに帰省していた志戸崎から学校へ戻る際に、悪天候のため、

「……、先刻一番の汽船に捨てられて青息吐息した自分は一旦汽船宿から帰らねばならなかつた。それで二番の汽船に乗らうとして居たのであつたが又此の船も来なかつた。残念ではあるが、どうする事も出来なかつた。裏山の風音は高まるばかりであつた。……。」

高い波浪のため、艇での連絡ができず、汽船は志戸崎を通過してしまいました。それでも、石島は午後の便に望みを託しますが、

「……、午後一時頃また家を出る船場まで出て居つたが湖面は波風で大分荒れてゐる。汗一つ流れぬせいか気持は善いけれども彼方十六島、麻生岬の方を眺めると只茫として何も見えないのである。心配は積るばかりだ。そのみか明

日の成績発表が案ぜられて居る所へ心配は二重である。だが待てど暮せど待つ船は来ず何遍か宿の棧橋を不安の裡に行きつ戻りつした。……。」

と汽船が来る気配はありません。石島は汽船の心配に加えて、学期末試験の出来が芳しくなかつたのか、その結果(学年末の成績が、1科目でも40点以下或いは平均60点以下の場合には、落第となつた)が心配でならなかつたようです。

15時を過ぎても汽船の影すら見え、途方に暮れていたところ、15時10分、隼丸が白浪を一蹴し、轟進して来て、棧橋に程近い所に投錨しました。2人の船頭が艇を出すと、数名の警察官が上陸して来ましたが、石島は、何事だろうといぶかりました。漁船の船体検査とのこと、で、検査が済むと直ちに乗船の準備に掛かつています。制服制帽姿の石島が部長警察官に懇願した結果、許しを得て、死地から救い出された気持ちで乗船しました。その船内での様子を次のように書いています。

「……、波浪が高いので【隼丸と艇の】双方動揺して容易に接近する事が出来ない。然し無事船室の人となつた。御巡りさんも厳めしい帯剣を腰から距してしまつた。荒れる湖上には海賊船【違法操業船】らしい船も見えない。その方は至極平和である。そして御巡りさんと一学生である。動揺に又動揺の中にも意外の快活である。雲は空中をおほうて南の空と西の方が僅かばかり薄黄く見えて湖上も亦真黒であつた。その上を大波が白く巻返す様に舷を漕くうつてくる船体はその度毎に波間に入る。大丈夫だと考へても底は水だ。地獄だと思ふと薄気味悪くなつてくる。唯インヂン【エンジンの茨城訛】の音が波を打勝つて轟然たる一律不変の音を立てて行く。壮快だ頭の裡には何も無い、遙かに見える山々が遠くなつたり又近くなつたり高くなつたり低くなつたりする。皆船の進行とそれにつれる動揺のためである。雨とまが

便利屋船

1930「昭和5」年9月発行『進修第32号』には、夏休み早々に、発動機船で鹿島へ史跡巡りに出かけた記事(霞ヶ浦縦断)4年中村敏行・中31回)が掲載されています。

発動機船は、長さ6間(約10.9m)、幅1間半(約2.7m)。乗組員は船頭が1人。そこに、社会科の長南倉之助先生以下、生徒21人が乗り込み、7時に桜川河畔(天町河岸)を出帆。桜川から霞ヶ浦に入り、崎浜の横穴を望み、三叉沖に至ると、誰もなく校歌を歌い始めます。

「……、たゞへて寄する漣は、終古渝らぬ霞浦の水」

「……、筑波の山のいや高く、霞ヶ浦のいや広く……。」

の節に至るや、生徒たちの元気は船中から溢れんばかり。三叉沖を過ぎ、浮島を右に見て霞ヶ浦を縦断。10時30分潮来に上陸し、約1時間、長勝寺や稲田神社を見学。11時30分出発、船中で昼食。12時大船津に上陸。藤原鎌足旧宅跡、鹿島城跡、根本寺と巡り、12時30分鹿島神宮に到着。本殿を参拝後、奥宮、御手洗、要石を見学。14時50分大船津発。順風に恵まれ、三叉沖も難なく通過し、18時45分土浦港へ帰っています。

この船は、当時は「便利屋船」と呼ばれていた、焼き玉エンジン搭載のポンポン船のようです。便利屋船については、中31回保立俊一が、『水郷つちうら回想』「便利屋船と荷馬車」の中で、次のように記しています。

「……、大正時代まで、土浦と附近の村との物資と情報の交流に便利屋があった。霞ヶ浦沿岸の各村は下場とよばれ、舟によって交通と物の輸送をしており、筑波方面の山根地区や谷田部、石岡、牛久やその周辺の村との交流は荷馬車によって行なわれており、何れも便利屋とよばれ、小型船及荷馬車によってなされていた。」

ふ大粒のしぶきが降りかかってくるので窓硝子もピツタリ閉めてしまった。甲板の上に見張の窓が切つてある。暫らく首を出して外を眺めてみた。大きな荒れくるふ白波がドウツと大きな凄惨な音を伴つて打かかってくる。丁度三叉沖がはるかになつて大土浦の影がほのかに見えるかむる頃暗い空からは大粒の雨急にぱらぱら降り来りて一室にもぐり込んだ。学生気分は全く失はれてすつかり海賊船を追撃中の様な感じばかりになつてしまつた。後の方からは憶病な汽船が浮島の後ろに風をさけてガタンブトン土浦に向つてゐるのが見えた。彼の船が朝から人を待ちあぐました上に来なかつたのだ自分には海賊船の様にくかつた。然し何と云つても警邏船に始めて便乗を許され荒波の湖上を走るのとは少しへもなく愉快であり尚且勇壮であつた。実に海国に生れて湖岸に生え立ちたる心地してえも云はれざる心地であつた。聞けば一時間四節【ノット】の速度ださうで何ぞこの大波も怖るゝに足らなかつた。一時間余りで土浦に無事到着した。船体は雨と波でびっしりよりであつた。」

石島の安堵の思いと嬉しさとが伝わってきます。本紙第152号で紹介したように、石島は、土浦中学最後の夏休みをのんびりと過ごしていることから、期末試験の結果は、彼が案じたほどではなかつたようです。

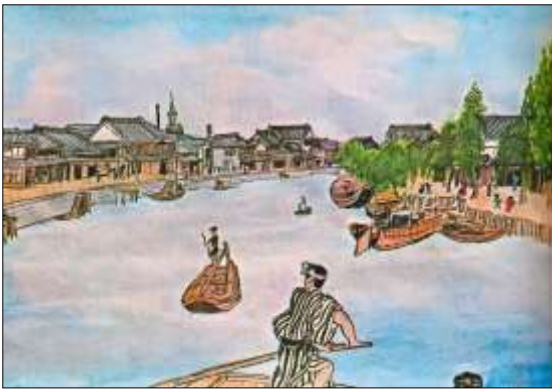
注1) 焼き玉エンジン

「焼き玉」と呼ぶ燃焼室を加熱して赤熱状態とし、そこへ重油などの燃料を噴射し、点火・爆発させるもの。この種のエンジンは、簡易で廉価なことから、動力化が求められていた小型漁船・渡船などの多くに、明治30年代から搭載されるようになった。

リズミカルな独特の爆音を立てて航行することから、「ポンポン船」と呼ばれ、漁港や河川のかな風物詩として親しまれたが、高度成長期に入ると、小型ディーゼル船に取って代われ、急速に姿を消した。

注2) たとしへなし

(警へ無し) たとしへなし。似ても似つかない。違ひすぎて比べようがない。はなはだし。



大正初期の川口川(『スケッチで綴るふるさと土浦』佐賀進(中27回)) (左上)
現在の土浦駅行き川口町バス停付近から桜橋バス停に向かっての風景。尖塔のある建物が警察署。左側の川岸に設けられた船着き用階段が「ダシ」。右側には高瀬船や発動機船が停泊している。
現在の同地点(白線内が川口川) (右上)



便利屋は荷物の輸送ばかりでなく文通や村人の買物まで引受けて文字通り便利を図ることが仕事であつた。交通機関の未発達な当時の人達は歩いて町に出て来ることは非常に大変なことであつたので、ほとんどの仕事を便

利屋にたのんでいた。村の小商いをしてる店の注文書などを町の問屋にとどけ、品物をあずかかって帰るような仕事も機械船の無かつた頃は漕いで来たので一日がかりの仕事であつた。天候の悪い日、風の強い日以外は毎日村と町との連絡をした。舟は川口川の岸につないで、船頭は注文の品物を買つたり、手紙をどけたりして町中を歩いた。舟には大体村の名前をつけていることが多く、木原丸とか牛渡丸とかの名前が普通で、舟をつなぐ場所もきまつていて、舟付き場の前の店などと連繋をとつて品物の整理などをしてもらつていた。村の商店からの注文を問屋にすると、問屋は荷物をまとめて船の出る時刻までに川口川の舟付き場にとどける。午後までかかつて注文品を集めると積荷を満載した舟は手漕ぎのろによつてのんびり霞ヶ浦をよぎって帰るのである。ほとんど毎日通つていたことは舟も荷馬車も同様であつた。船頭も馬方も問屋や町の人達とは顔なじみであり、商売以外の私的なことまで相談に乗つたり、村と町との橋渡しとして心のつながりの強い存在であつた。

大正末期には小型の機械船になり、扱う品物も増加して川口川沿岸はこの小型運送船でいっぱいになり、岸は荷物の集積場となりぎわいを見せていた。焼き玉エンジンという初期の発動機をのせた舟の速度はせいぜい十五キロぐらゐのものであり村人の交通機関としても利用されたが、一日一往復の船便であつた。……。

この便利屋船や荷馬車は、戦後も町とその周辺地域とを結ぶ輸送業務を担つていましたが、1960年代後半からのモーターゼーションの進展に伴い、トラック輸送の台頭、自家用車の普及によつて、その仕事は無くなり、急速に姿を消していきました。